

卒業研究2

責任者・コーディネーター	構造生物薬学分野 野中 孝昌 教授 生体防御学分野 大橋 綾子 教授 衛生化学分野 杉山 晶規 教授 臨床医化学分野 那谷 耕司 教授 情報薬科学分野 西谷 直之 教授（成績とりまとめ担当）		
担当講座・学科(分野)	創薬有機化学分野、天然物化学分野、構造生物薬学分野、分析化学分野、機能生化学分野、生体防御学分野、分子細胞薬理学分野、臨床医化学分野、薬剤治療学分野、創剤学分野、薬物代謝動態学分野、衛生化学分野、臨床薬剤学分野、情報薬科学分野、地域医療薬学分野、薬学教育学分野		
対象学年	5, 6	区分・時間数	実習 90 時間
期 間	通期		
単 位 数	6 単位		

・学修方針（講義概要等）

卒業研究1で学んだ基礎的な技術や知識をもとに、より専門的な研究を実施する。この科目を通して、医療における問題点を抽出し、科学的・論理的に問題を解決するための研究マインドを育む。研究を実施する過程で遭遇する様々な困難を克服することで、問題解決能力を身につけるために習練する。研究室における対人的な関係から協調性を養成し、後輩の指導を通じて後進の育成の機会を得る。さらに、各分野が主催する研究セミナーに参加して、発表技能、態度、コミュニケーション技術や生涯学習の重要性を学ぶ。卒業研究に関する論文作成、口頭発表などを通して実験結果のまとめ方やプレゼンテーションを行う能力も身につける。

・教育成果（アウトカム）

卒業研究を実施することで、課題発見能力、問題解決能力や生涯学習への意欲が身につく。また、研究室に所属することで、コミュニケーション能力や社会性を身につけることができる。（ディプロマ・ポリシー：2, 5, 7, 8, 9, 10）

・成績評価方法

卒業研究全般における態度（研究に臨む態度、研究室の方針やルールの順守、下級生の卒業研究の進捗に配慮する姿勢、各10%で合計30%）、問題解決能力の向上（10%）、英語論文の読解（5%）、学会等での発表（5%）、学部主催の卒業研究発表会における評価（25%）、卒業論文（25%）で評価する。これらの評価は次ページの評価表によって行われる。

・特記事項・その他

担当分野からの指示が記されている場合は、それに従うこと。記載がない場合は、各実習時期に担当分野の指示に従うこと。研究の進捗に応じて、担当者から指導や助言を受ける。

各コマに対して、事前学習（前回の研究記録の見直しや関連情報の収集など）に30分、事後学習（研究記録の作成など）に30分程度を要する。具体的な事前・事後学習の内容は、担当者から指示を受ける。さらに、卒業研究発表会の準備に要する時間として30時間程度、卒業論文を作成する時間として60時間程度を必要とする。

	5	6	9	10	特記事項 (加点可)
研究に臨む態度 (実験研究・調査研究)	研究を遂行できなかった。	研究倫理の遵守に努め、指示に従って研究を行うことができた。	研究に関する指示を聞きつつ、指導者との意見交換をして研究に取り組むことができた。	指示をよく聞き、時に自らアイデアを出して研究に従事した。	よりよい研究にしようとする前向きな気持ちをもって研究に従事した。 (2点まで)
研究室の方針やルールの順守	研究室の機器などの保守、清掃、整理整頓のルール順守ができていない。	研究室の機器などの保守、清掃、整理整頓など基本的な研究室のルールの順守に努めた。	/	研究室の機器などの保守、清掃、整理整頓の分担などの基本的な研究室のルールを順守して研究を進めることができた。	研究室の機器などの保守、清掃、整理整頓の分担などの基本的な研究室のルールの改善などの提案ができた場合は加点可(2点まで)。
下級生の卒業研究の進捗に配慮する姿勢*	下級生とコミュニケーションできなかった。	下級生とコミュニケーションしたり、指導したりすることに努めた。	下級生の指導にあたり、下級生の卒業研究の向上にも配慮した。	下級生の指導に熱意をもってあたり、次世代を担う人材を育成する意欲と態度が感じられた。	/
問題解決能力の向上や概略評価	担当教員が概略評価を行う。				/
		3	4	5	/
英語文献の読解	英語の文献の読解に取り組むことができなかった。	英語の文献の読解に取り組むことができた。	英語文献を読解することができた。	自ら英語文献を検索して読解することができた。	/
自己研鑽	/	学会・講演会・研究会等に参加し自己研鑽に努めた。口頭発表5点、ポスター発表4点、聴講型の会の参加は1回につき1点を目安とする。(5点まで)			/
		15	20	25	
卒業研究発表会における発表の評価	/	評価者が採点を行う。			
	**				/
医療や薬学における研究成果の位置づけを含めた卒業論文の執筆	卒業論文を提出できなかった。	卒業論文はおおむね定められた形式に沿って書かれていた。	卒業論文は定められた形式に沿って書かれ、自分が行った研究方法や、実験結果を正しく説明できていた。	卒業論文は定められた形式に沿って書かれ、医療や薬学における研究成果の位置づけについても触れられていた。	/

*本項目は、ディプロマ・ポリシー10の「次世代を担う医療人を育成する意欲と態度を有する。」を念頭において設けた。

**卒業論文を提出しなかった場合は単位を認定しない。